

# 町民文芸



## 只見短歌会

令和二年五月詠草

大塚栄一

指導

曲る腰いたはりつつも鋤を打つ九十路の我は土に親しむ

馬場 八智

過ぎし日は共の職場と声かけられ唐突なりて名前いでこづ

目黒 富子

裏山の若葉萌え行くを眺めつつゼンマイ採りし日目裏に顕つ

渡部ゆき子

母方の叔母百才の祝い受くよきご家族と喜び共に

関谷登美子

大型の田植え機入る整理田は人も少なく時代は流るる

渡部ヨリ子

くぐもれる心の隅に光さすごとくに牡丹の花ひらきたり

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

六月定例会

目黒十一

指導

父の日や三代揃う大家族

一穂

腕痛んでクイズ本見る梅雨晴れる

植え了えて補植の苗を田の隅に  
早苗箱田ごとに配るピアスの娘

恒夫

此の友桜とともに散りて逝く

修一

嬰兒のつめ切る娘春深し

五月来る朝の畑に仁王立ち  
食べ頃を逆算で蒔く大豆かな

礼

露柄杓木漏れ日も汲む渴きかな  
淋漓とまでゆかぬ額の皺の汗

幸生

蛇啗え鷹舞う空や白き雲  
箱根山軋む鉄路に紫陽花映ゆ

信

春眠に忘れ識字の多さかな  
母がいて我を待ち居る桜餅

都

